

4月27日（日）礼拝 「空なる人生からの転換」

空という言葉から何をイメージするでしょうか。

①つかの間もしくは実体がない。

ヨブ記7章7節「心に留めてください。私のいのちが息にすぎないことを」

息=空 息はつかの間に存在するもの。

②もろさ、弱さ

本当に頼れるものが私たちの周りにあるか。世の中の三種の神器（能力、経済的基盤、健康）は、いつまでも続かないもろいもの

③無益

ヨブ記9章29節「私はきっと、悪しき者とされるでしょう。なぜ私は空しく労するのでしょうか。」人生を通して自分が何を生み出しているのかと考えるなら、いたずらに労しているのではと思えて空しくならないか。

→伝道者の書は、自分の人生を生きる中で空という表現を用いながら、私たちに人生について考えさせる。

すべてが空だと言う。例えば人のわざ（行動）（1：14，2：11）快樂・楽しみ（2：1）若さ（11：10）死（3：19）知恵があることと愚かであること（2：15，16）人は、日の下にある空しいものの上に自分の人生を築こうとしているのではないか。

聖書は、日の下以外の別の世界を私たちに提示する。それは信仰の世界であり、目に見えない神を信じて生きる世界。

ウエストミンスター小教理問答

問い1「人のおもな目的は何ですか。」

答え 「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。」

聖書は、人の人生のおもな目的として神の人生をあらわし、永遠に神を喜ぶことを私たちに教えている。

神を信じることにより、私たち自身に大きな変化がある。

ローマ人への手紙6章23節「罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主イエスキリストにある永遠のいのちです。」罪とは、神を離れ、的外れな、空なる人生を送ること。空しい人生の最後に、当然受け取るべき報酬としての死をすべての人が受け取る。しかし、神は恵みの賜物として永遠のいのちを与える。神の栄光を現し、永遠に神を喜ぶ人生であり、死で終わる人生ではない。そして神が私たちの人生に報いてくださる。どんな人生であっても神によって意味が与えられる。苦しみや悩みや悲しみにも神によって意味が与えられる。神を信じることが空なる人生からの転換となる。

子ども信仰問答

問8 「まことの神さまはなんにんもおられますか。」

答え 「まことの神さまは、ひとりだけです。」

聖書 「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。」(申命記6章4節)

神と呼べる存在は主なる神様だけであって、この神さまだけが、唯一のまことの神なのです。

<解説> 申命記6章4節の「主は唯一である」とは、他の宗教にはさまざまな神があるけれども、キリスト教にはただひとりの神がおられるという意味ではありませんし、他の宗教とキリスト教とを比較研究する中で、他の宗教と違い、キリスト教では唯一神を礼拝しているということではありません。「主は唯一である」とは、そもそもほかに神はないとの意味であって、主なる神と神のことばである聖書は神的な存在というものを他にはいっさい認めていません。ただ唯一のまことの神がおられるだけです。そう考えますと、第一戒の「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。」(出エジプト記20章3節)も、神を信じつつ、他の偶像の神を礼拝するようなことがあってはならないとの意味ではなく、そもそも神の民が自分たちで主なる神以外に神と認めるべき存在があってはならないとの意味です。そう考えますと、クリスチャンにとっては多神教という考え方もありえないと言えます。なぜなら、多かろうが少なかろうが、主なる神以外に神と呼ぶべきものは存在しないはずだからです。